図書館だより

第３１号　令和５年３月発行

大島商船高等専門学校図書館
山口県大島郡周防大島町大字小松１０９１番地１

目　　次

巻頭言

心穏やかに	図書館長	浅川　貴史	1

第２０回読書感想文コンクール優秀作品発表

最優秀賞

人間	情報工学科２年	藤本　一毅	2

優 秀 賞

俯瞰と喜劇	電子機械工学科３年	佐々木成道	3
言葉の力は無限大	商船学科１年	横山　琳子	4

佳　　作

ジェンダーと男女格差	商船学科２年	千苅　琢磨	5
言葉の力	商船学科２年	三浦 あかり	6
静かだけど熱い世界	商船学科２年	日向　　翼	7
先生からの贈り物	情報工学科１年	清綱　美吹	8

第２回読書ラリー優秀者発表　9

推薦図書

インタフェースデザインの教科書【第２版】	電子機械工学科	松原　貴史	10
小一時間でゲームをつくる ──7 つの定番ゲームのプログラミングを体験	情報工学科	重本　昌也	11

ブックハンティングに参加して　12

図書館利用状況　16

※表紙写真：第 20 回読書感想文コンクール表彰式（校長室にて），最優秀を受賞した藤本さん

巻頭言

心穏やかに

図書館長・図書館司書　浅川　貴史

図書館長の浅川です。ここ数年は、新型コロナウイルス感染症に関連する対策・対応に振り回されたが、皆さんはどうでしたか。授業だけでなく就職活動までオンラインとなり、これまでにない経験をされたのではないでしょうか。一方、コロナ禍前までSNSなどは負の側面ばかりが取り沙汰されることが多かったですが、オンラインばかりの生活の中で仲間との連携ツールとして見直される、いや本来の目的にかなった使い方がされ、情報屋である私はうれしくも感じていました。

そんなコロナ禍の中、私は図書館司書の資格取得のため通信制大学で勉強していました。通信制大学は基本的に対面での授業がないので、コロナ禍だからといって特別なことはないのですが、一部のスクーリング授業（実習）は対面で受ける必要があります。こんな時期でもあり、スクーリング授業は無しなのかなと考えていましたが、担当教員の方から「こんな時期だからこそ対面で授業を行います。戦争であれ、パンデミックであれ、こんな時こそ、冷静で建設的な考えが必要です。そのためには貴重な資料の宝庫・砦（とりで）である図書館を閉館することはできません。」というお話がありました。実際には、図書館の通常開館はできなくとも、それに変わる書籍の郵送貸し出しや、著作権法の改正により、知識を求める人への対応を図るとともに、国立国会図書館ではデジタルアーカイブ化を強力に進めました。本来の使命を忘れず、臨機応変に対応する力が試されているのだなあと感じると共に、高専の図書館で重要なこととは何だろうかと考えました。

コロナ禍だけでなく、高専の図書館の使命とは何か。設置基準では、研究や学習のための図書資料の提供が主な目的となりますが、本校の図書館では心穏やかな空間の提供も気に掛けています。図書館の改修が終わり、新しく明るくなっただけでなく、絵本やいのちに関する図書、海事・海洋や防災に関する図書など特別なコーナーを設けるとともに、落ち着いて「ぼーっと」できる空間を提供したいと考えています。皆さんも自分の部屋ではなく、ひとりきりで、スマホも置いて、お気に入りの本でも眺めて「ぼーっと」してみませんか。心穏やかに未来を空想するっていうのもいいんじゃないでしょうか。

ちなみに私は山の中で「ぼーっと」妄想しています。

最優秀賞

「人間」

『吾輩は猫である』　夏目漱石著　新潮社 他

情報工学科２年　藤本 一毅

僕が「吾輩は猫である」という本を選んだわけは、「吾輩は猫である」の書き出しである「吾輩は猫である。まだ名前はない」という書き出しは何度か耳にしたことはあるが実際にこの本の全文を読んだことがなかったため、この機会に読んでみたいと思ったからである。

実際にこの本を読んでみた感想として初めに思ったことは、この猫はとても客観的で、冷静であるということである。また、この猫の飼い主である、苦沙弥先生の家を訪れるたくさんの知識人たちがとても面白いということである。この知識人たちは、賢くあるのだが、どこか抜けているところがある。普通の人では考えないようなおかしなことを話題にして、混ぜ返してみたり、まじめになってみたり。正直何を考えているのかよくわからない。というのがこの本を読んでみての感想である。

この本は、人間を猫の目線で見ている。猫から見た人間とは、わがままで、変な冗談でボーイをからかい、枕元に山の芋を置いて寝るものである。これもまた、つかみどころのない人間像である。しかし、僕はこの猫の言っていることにとても共感してしまった。人間というものはこんなものである。いつでも離れたところから見ると、愚かにもつかないことをしている。この知識人たちが、滑稽な人間の象徴なのである。

しかし、それだけが人間のすべてかと聞かれるとそういうことでもない。何か違う。人間は、愚かという言葉だけでは言い切れない。まだ何かあるように思うのだ。けれでも、僕は猫曰く、小さな坊やは「ことによると八木独仙君より悟っているかもしれない」で、また元の堂々巡りに引き戻されてしまう。坊やは、やりたい放題の暴君である。やりたいことをやって満足している方が、なるほど、よっぽど悟っている。この知識人たちが、部屋の中であれこれ議論し、何が変わったか。どうなったか。

考えてみると、僕も人間である。僕も、愚かなことをしているであろうか。猫にそうだそうだ、と容易に共感していることが愚かかもしれない。人の意見に引きずられる。主体性のない人間だ。ただ、ここまで来ても人間を「愚」と言い切ってしまうのには不安が残る。苦沙弥先生が、寒月君が、迷亭がふがいなさの合間から何かをのぞかせている。しかし、それが何かと言われるとよくわからない。僕が人間をさっさと「愚」と言い切ってしまわないのは、僕が人間で「愚」なんて嫌だという僕の「愚」のせいかもしれない。これも猫からみれば、一蹴すべきくだらない議論かもしれない。

その答えはまたしても猫から与えられた。
のんきに見える人々も、心のそこを叩いてみると、どこか悲しい音がする。これだ。と思った。「愚」はうわべ。目に見えるもの。うわべの愚を取りはらった時、そこにあるもの。聞けば悲しい音がするもの。

人間は悲しい生き物なのだ。自然を野の手で支配し、動物たちを従えても、まだまだ悲しぃ弱いのだ。人間は、「孤独」だから。だから、大人たちは苦沙弥賛成の家に集まった。殻らは無意識かもしれないが、人を求めて、人と人との接触で、自分を孤独から救おうとして。だから、彼らにとって話題なんてどうでもいいことだったのだ。誰かとしゃべっていられたら、それでもよかったのである。いくら利口ぶって世の中を鼻で笑って，丁度猫のように客観視しているつもりでも、それは、ただの悲しさ隠しだ。みんな、愚かなやつばかりだと口先でせせら笑っていても、本当は自分が弱く、悲しいということ、孤独だということが分かっていたのではないか。

僕は、「吾輩は猫である」が今まで読んだものの中で、一番といっていいほどに好きになってしまった。人間の底に潜んでいる「孤独」を無意識に垣間見ていたからかもしれない。人間は「孤独」だから優しくなれるのだと思う。無茶を言ってしまえば、どんなに愚かでも、そんなうわべはどうでもいい。そこがあるのなら。人間だって、そんなみじめなものじゃないそう思ったら、一気に確信持ててきた。「孤独」という一つのつながりを持ち、人を求めあう人間。同じ人間同士、きっとうまくやっていける。どんな世の中でも捨てたもんじゃない。人間の心のそこに根づくやさしさは、永久の者だと思うし、そうあってほしい。それが今、僕がやっと見つけた「人間」というものの答えなのだから。

優秀賞

「俯瞰と喜劇」

『吾輩は猫である』　夏目漱石著　新潮社 他

電子機械工学科３年　佐々木　成道

私はこの本を読み、最終的に人間として生まれてきたことに嬉しさを感じた。
この本は博識で知的な猫である吾輩が、人間と暮していく中で、人間の持つ愚かさや優れていると感じた点を第三者の視点でユーモアたっぷりに私たち読者に語ってくれた。私が日々、人間として当然であることのように考えているものも、猫という身近にいる別の生き物からの視点で見ることでこうも面白く感じるのかと驚かされた。

ここでは、私が「吾輩は猫である」を読んでいく中でハッとさせられた、同じ気持ちになったことがある、あるいはこれは納得できないなどといった私の感動があった文やセリフを引用し、自身の経験や思想と比較していくこととする。

「吾輩は猫である。名前はまだない」このセリフは、一番初めに書かれているこの本の代名詞的なセリフである。おそらく内容は知らなくてもこのセリフは知っているという人は日本にごまんといるはずである。それほど有名なセリフだ。さて、私がなぜこのセリフを選んだのかというとセリフのインパクトもあるが、「吾輩は猫である」について述べていく中で外してはならないセリフだと感じたからである。世間一般的に動物を飼う際、名づけを行うことは常識である。その方が愛着も沸くし、呼びやすいからだ。この本の書かれた明治時代でも名づけは一般的だ。それなのになぜ、吾輩は名付けされないのか。私はまず、飼い主である苦沙弥のずぼらな性格によるものかと思った。しかし、いくらずぼらでも吾輩をそこそこ可愛がっている飼い主がそんなことをするとは考えにくい。もっと他に理由があるのではないかと思った。そこで自分なりに調べてみると面白い考えがあったため、小池清治氏の「『吾輩は猫である』の猫はなぜ名無しの猫なのか？」という研究論より一部引用させていただく。「「吾輩」である猫を珍野苦沙弥に所属しない、自由の独立体として漱石がふるまわせたかったからではないだろうか？」この文章を読んで私はなるほどな。と納得した。吾輩は物語の序盤から終盤まで徹底した俯瞰主義者を貫いている。このことに照らし合わせて考えても私はこの考えがもっともであると感じた。

「世の中に退屈ほど我慢のできにくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ」このセリフには激しい同意を抱くとともに、現代の日本がこの信条の下で回っているとも感じた。最近の日本ではスマホの普及とともに暇を持て余すということがないように感じる。みな１分でも空きがあれば SNS を見て時間をつぶし、あまつさえそれによる時間不足に嘆きさえする。これは前述の言葉が人間、少なくとも現代日本人の深層心理を的確に表現しているといえる。また、このセリフを読んで私はある言葉を思い出した。「退屈は犯罪です」これは Netflix の広告だ。「吾輩は猫である」が書かれてもう 117 年は立つというのに人間の心情は変わらないことに驚くとともに、夏目漱石の人間が抱えている深層心理のうまい言語化にもはや感動すら覚えた。

「呑気と見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」私はこの本の中でこの言葉に最も感情をゆすられた。なぜならこの言葉を実感させる出来事をついこの前体験したばかりだからである。私には仲の良い友人がいて彼はいつも明るく前向きでどこかのほほんとした空気を持っている。ある日私はいつも通り、話していると彼の様子がどうも変である。いつもと同じように明るく振舞っているがどこかぎこちない。私が「どうしたのか」と尋ねると友人はどうにも歯切れ悪く「何でもない」と答えるのだ。何度か聞いていると不意に悲しそうな顔になりつつまた「何でもない」というだ。私もあまりしつこくては相手に悪いと思いそれ以上の詮索はやめたのだがあの時の彼は、まさに悲しい音が反響する心理を抱いていたかのように思える。私には忘れられない体験だ。また彼だけではない。現代の日本人は一見明るい人であっても例外なく皆、心の奥底に悲しみを抱えているのではないだろうかとも思った。

ここまで分の引用とそれに対する私個人の心情を述べてきたが最後に、この本全体を通した私の感想を改めて述べる。

この本で私は、人間に宿っているあたり前と見過ごしてきた心理深くにある感情や考えを見直すきっかけを得た。これは人間を吾輩という人以外のフィルターを通して見つめるこの本の特長によるものであったといえる。今後、私の人生の中でいくつかの障害にあたるかもしれない。その際俯瞰してみると案外滑稽なものであるのかもしれないとすら感じた。

優秀賞

「言葉の力は無限大」

『本日は、お日柄もよく』　原田マハ 著　徳間書店

商船学科１年　横山 琳子

この本の表紙は他の本とは一味違い、表紙には一つのご祝儀袋が書かれているだけでした。そんな珍しく、変わった所から他のどの本よりも心を引かれ私は「本日は、お日柄もよく」を手に取りました。この本は主人公であること葉が幼馴染の結婚式でのスピーチで眠くなってしまった失態から始まります。こと葉はこれまで何人もの友達の結婚式に参加してきました。この日のスピーチの最中も、私には果たしてこの先、出会いをして結婚をする日は来るのだろうか。自分は毎日何も変わらない平凡な日常を過ごしていてなんてつまらないのだろうとスピーチに全く興味なく、そんなことを考えていました。

そんなある日幼馴染である今川厚志の結婚式でのスピーチでこと葉は思わず身を乗り出して聞くスピーチに出会ったのです。マスカラが落ちてしまうくらい、自分でもびっくりするほど泣いていたのです。そしてこの会場でこと葉は伝説のスピーチライター久遠久美に出会ったのです。こと葉はこれまで製菓関連の仕事をしていましたが、仕事をきっぱりと辞め彼女に弟子入りし、言葉の持つ世界へと引き込まれていったのです。私はこの本を読み進めていくうちに、言葉には無限大の力があるということに気付かされました。言葉というのは何気なく誰もが使うことが出来る能力です。ただ意識をしているか、していないかで自分にとっても、周りの人にとっても特別な意味になることがあります。こと葉は今までスピーチに聞く耳すら持たないような人だったのに、今の職を辞めてまで弟子入りをしています。これは久美さんのスピーチがこと葉にとってものすごく特別な意味に感じたのだと思います。また、どんなに思っていても言葉にしなければほとんど伝わらないと思うので私自身しっかりと言葉にして伝えていきたいなと思いました。また、こと葉が久美さんの元で弟子込りしていく中で様々な事を学んでいきます。その中で心に残ったスピーチのコツが二つあります。一つ目は、心静かに平常心で待つということです。スピーチは最初のフレイズでそのスピーチの印象が変わります。そのため初めのフレイズを聞いてもらうのはすごく重要です。前に立った人間が何も話をしないと不思議に思い注目してしまいます。私自身、中学校の体育祭で応援団をしていたとき何度かこの方法を使ったことがあったのでとても共感することが出来ました。二つ目は、原稿は暗記するものではないということです。暗記はするもののその場の雰囲気で臨機応変に内容を変えることは重要です。いくら優れた原稿でも棒読みになってしまったらスピーチを上手に伝えられません。言葉を送る側も言葉を送られる側も一生忘れられないエピソードをスピーチの中に入れられるようにしていきたいです。私自身も過去に書いた原稿を暗記して満足していたり暗記した内容を緊張して忘れてしまい頑張って思い出そうとしながら発表やスピーチをしてしまったことが何度かあります。今この本を読んでから思い返すと当時は丸暗記をすることに満足して、聞いている側の反応や場の雰囲気はまったく考えていませんでした。これから人前でスピーチを行う機会があった時は、こと葉のことを思い出し臨機応変に言葉を選び、表現し聞いている人の心を掴めるようなスピーチをしていきたいです。

この本を読んで私の心に響いた大切な言葉があります。

「ほんとうに弱っている人には誰かがただそばにいて抱きしめるだけで、幾千の言葉の代わりになる。そして、ほんとうに歩き出そうとしている人には、誰かにかけてもらった言葉が何よりの励みになる。」

という言葉です。私たちは周りの誰かが弱っている時に何か言葉をかけてあげようと必死で言葉を探すと思います。私自身、中二の春祖母が亡くなった時、哀しみで落ち込んでいた私に母がずっと側にいて背中をさすってくれたことを思い出しました。直接言葉をかけてもらったわけではないのに私の気持ちを理解してくれたように感じとても励みになったことを思い出しました。そのときの私にとっては久美さんが言う幾千の言葉の代わりが母の存在だったのかなと今気付かされました。

私はこの本を読み、人の気持ちを動かし、時に世界を変えるほどの力を持つ言葉の素晴らしさを改めて感じました。だからこそ人の心に寄り添い、時にはそっと背中を押すような言葉を紡げる人になりたいと今、私は強く思います。

佳　作

「ジェンダーと男女格差」

『「男女格差後進国」の衝撃』　治部れんげ 著　小学館新書

商船学科２年　千苅 琢磨

　この本の表示のデザイン、そしてタイトルを書店でひとめ見たときから、どこか魅かれるものがあったので、読んでみることにしました。

　この物語は、主人公である、ごく普通のＯＬだった二宮こと葉が、陰ながら想いを寄せていた、幼馴染の厚史の結婚式の場で、かつて目にしたことがない、感動的なスピーチに出会うことから始まります。

　かつて厚史の父、今は亡き今川議員の片腕、伝説のスピーチライターと呼ばれている久遠久美という女性の祝辞で、心を鷲掴みにされたこと葉は。彼女に見込まれ弟子入りをはたします。

　そして、今度はこと葉が、厚史の人生大一番とも言える大役の右腕としてスピーチに挑みます。

　こと葉が、結婚式のスピーチで失態をおかしてしまった原因として、そのスピーチがとても眠くなってしまうということがありました。

　このような経験は、今の私にとって身近に感じました。結婚式という場面ではないものの、普段の学校での授業は、あたりまえに眠くなるし、校長先生の話はうわの空です。

　だから、こと葉にとても共感を抱きました。

　この物語には、スピーチライターの他にも、言葉の師匠と尊敬されているリスニングボランティアという職業も描かれていました。自分の意見を言ったり、必要以上に応答したりせず、ただひたすら、相手の話を黙って聴く　　けなのです。

　これが、相手のことを否定せず、受け止めることだとは考えもしませんでした。

　私は、今までただつまらなかいな、面白いなと思って聞いていなかったのがとても恥ずかしくなりました。相手を受け止める気持ちが足りてなかったんだなと感じました。

　だから、自分が興味の無い話でも、きちんと聞こうと思いました。

　眠たいスピーチの後、スピーチライターである久遠久美のスピーチが始まります。

　このスピーチの内容を実際に読んで、私自身が本当に会場にいるかのように、あっという間に引き込まれました。

　とても臨場感があり、心が込められていて、相手に本当の気持ちをありのままに伝えているんだと感じました。

　体裁よく整えられた言葉ではなく、ありのままの言葉で話すことで、こんなにも人の心を惹きつけることができるのだ、ありのままの言葉だからこそ、より心に染みるんだと思いました。

　スピーチライターという職業は、明るみに出て、自分がメインになることなく、常にだれかの「影」でなければなりません。

　でも、言葉に救われた彼女だからこそ、言葉に対する恩返しなのではないかと思いました。

　物語の後半では、スピーチライターとしての実力が試されるような選挙活動シーンがあります。そこで、こと葉と、立候補者であり幼馴染の今川厚史を取り巻く人々の優しさと無償の愛を感じました。

　私たちが普段生活していて、「仲間」の存在は、かけがえのない大切なものだと思います。自分一人ではできないことも、仲間がいたからできたこともたくさんあったはずです。

仲間っていいな、そう感じて心が温かくなりました。

　今、自分の周りに、こんなふうに無償の愛を注いでくれる存在が一体何人いるんだろうか、そんなことも考えさせられました。これは、自分自身の人柄もそうですが、それと同じぐらい、相手を思いやる言葉の力も大きいのではないかと感じました。

　言葉の持つ力は、私たちの想像以上に大きなものであり、変幻自在です。

　だから、言葉を操ることは難しいのです。誰かを傷つけたり悲しませたりするためでなく、幸せな気持ちにしたり、喜ばせるために言葉を発していける人になりたいです。

佳　作

言葉の力

『本日は、お日柄もよく』　原田マハ 著　徳間書店

商船学科２年　三浦　あかり

　この本の表示のデザイン、そしてタイトルを書店でひとめ見たときから、どこか魅かれるものがあったので、読んでみることにしました。
　この物語は、主人公である、ごく普通のＯＬだった二宮こと葉が、陰ながら想いを寄せていた、幼馴染の厚史の結婚式の場で、かつて目にしたことがない、感動的なスピーチに出会うことから始まります。
　かつて厚史の父、今は亡き今川議員の片腕、伝説のスピーチライターと呼ばれている久遠久美という女性の祝辞で、心を鷲掴みにされたこと葉は。彼女に見込まれ弟子入りをはたします。
　そして、今度はこと葉が、厚史の人生大一番とも言える大役の右腕としてスピーチに挑みます。
　こと葉が、結婚式のスピーチで失態をおかしてしまった原因として、そのスピーチがとても眠くなってしまうということがありました。
　このような経験は、今の私にとって身近に感じました。結婚式という場面ではないものの、普段の学校での授業は、あたりまえに眠くなるし、校長先生の話はうわの空です。
　だから、こと葉にとても共感を抱きました。
　この物語には、スピーチライターの他にも、言葉の師匠と尊敬されているリスニングボランティアという職業も描かれていました。自分の意見を言ったり、必要以上に応答したりせず、ただひたすら、相手の話を黙って聴く　　けなのです。
　これが、相手のことを否定せず、受け止めることだとは考えもしませんでした。
　私は、今までただつまらなかいな、面白いなと思って聞いていなかったのがとても恥ずかしくなりました。相手を受け止める気持ちが足りてなかったんだなと感じました。
　だから、自分が興味の無い話でも、きちんと聞こうと思いました。
　眠たいスピーチの後、スピーチライターである久遠久美のスピーチが始まります。
　このスピーチの内容を実際に読んで、私自身が本当に会場にいるかのように、あっという間に引き込まれました。
　とても臨場感があり、心が込められていて、相手に本当の気持ちをありのままに伝えているんだと感じました。
　体裁よく整えられた言葉ではなく、ありのままの言葉で話すことで、こんなにも人の心を惹きつけることができるのだ、ありのままの言葉だからこそ、より心に染みるんだと思いました。
　スピーチライターという職業は、明るみに出て、自分がメインになることなく、常にだれかの「影」でなければなりません。
　でも、言葉に救われた彼女だからこそ、言葉に対する恩返しなのではないかと思いました。
　物語の後半では、スピーチライターとしての実力が試されるような選挙活動シーンがあります。そこで、こと葉と、立候補者であり幼馴染の今川厚史を取り巻く人々の優しさと無償の愛を感じました。
　私たちが普段生活していて、「仲間」の存在は、かけがえのない大切なものだと思います。自分一人ではできないことも、仲間がいたからできたこともたくさんあったはずです。
仲間っていいな、そう感じて心が温かくなりました。
　今、自分の周りに、こんなふうに無償の愛を注いでくれる存在が一体何人いるんだろうか、そんなことも考えさせられました。これは、自分自身の人柄もそうですが、それと同じぐらい、相手を思いやる言葉の力も大きいのではないかと感じました。
　言葉の持つ力は、私たちの想像以上に大きなものであり、変幻自在です。
　だから、言葉を操ることは難しいのです。誰かを傷つけたり悲しませたりするためでなく、幸せな気持ちにしたり、喜ばせるために言葉を発していける人になりたいです。

佳　作

「静かだけど熱い世界」

『喜嶋先生の静かな世界』　森　博嗣 著　講談社文庫

商船学科２年　日向 翼

「社会というのは、人間関係が生い茂ったジャングルのようなところで、なにものにも触れずに生きていくことはできない。」そんな世界から隔絶された静かな世界。

私が「喜嶋先生の静かな世界」という本に出会ったのは、担任の先生におすすめされたからです。先生は昔この本に支えられたことがあったそうです。本の題名から内容が全く想像できずに、思わず図書館に直ぐに行き、読み始めました。

主人公の橋場君は小さな頃から根っからの理系で、興味があることには貪欲に学んでいました。そんな彼にとって、大学はただの高校の延長にしか過ぎず、退屈な日々を過ごしていました。しかし、喜嶋先生との出会いによって学問への思いや人生が少しずつ変わっていくという物語です。初めの方は、謎の呪文の様な専門用語をさも当たり前のように語る主人公に対して、私は勉強はあまり得意ではないので、大学とはこんなに恐ろしい場所なのかと思いました。しかし、そんな拒絶反応を起こしていた自分も、物語が進むにつれ目が釘付けになる程熱中し、時間も忘れてただただページを捲っていました。こんなに本を読みたくなったのは初めての経験でした。

この本を読んで、研究者の世界を体感できました。中村さんや喜嶋先生と出会い、橋場君は研究にはまっていきます。食事の時も寝る前も研究について考え、あの数式は、あのコードは、と試行錯誤する毎日。机に座り、黙って作業する。一つのことに熱中する楽しさと、研究の難しさ、社会から一切干渉を受けない、静かな世界。一般的に見たら、返事にしか見えませんが、そんな研究者の世界が大好きになりました。研究とは普段私がしている勉強と決定的に違い、先生が問題を決めて、決められたゴールに向うだけに対して、研究とは、自分で問題を見つけ、あっているかも分からない、もしかしたら間違っていて、ふりだしに戻るかもしれない、正解を導いても何の役にも立たないかもしれない。橋場君によると問題を見つけるのに一番時間がかかるらしい。本文中の好きな表現で、研究者は山を登りながら、自ら山作っている、滑り下りる爽快感のために、というのがある。山というのはこの場合、研究する問題で、実際問題を解くのは山を下りる時で、それまでは自分にふさわしい、自分にしか解けない問題を探す、つまり山を作っている。とにかく高い山を作り、長く速く滑りたい、そんな夢を持っている。「学問には王道しかない」こんな喜嶋先生のセリフがある。研究者は自ら高い山を作り、その研究者が通った道が「勇者が歩く道」「王道」になっているんだなと思いました。私は静かな世界に住む人間がさらに好きになり、尊敬するようになりました。しかし、静かな世界はいつまでも続きません。物語の最後には、橋場君は自分の生徒を持ち、自分の研究に使い時間がなくなります。そして気づいたら静かな世界は消え、社会人になっていました。読んでいてとても寂しい気持ちになりました。でもそれが歳をとることであり、いろんな意味で大人になることなのかなと感じました。

私はこの本から夢中になることの大切さを学びました。何か好きなことを見つけ、それに夢中になるのは、その人にとっては楽しくてしょうがない。難しくて、険しい山を登る苦しさと快感。何かに夢中な人は、この世で一番幸せな人だと思いました。今の自分は特にこれといった趣味はありませんが、小学生の時は図鑑を眺めるのが大好きで、恐竜、虫、魚、動物の名前を覚えようとした時間はとても幸せでした。動物博士になろうと考えたほどでした。

私は、あと数年もすれば大人になり、社会に出なければなりません。この本を通して、改めて自分は何がしたいか、何に夢中になれるのか考えさせられました。だから学生の今のうちに興味がある、夢中になれる教科、分野を見つけたいです。まずはそのために、普段の勉強をしっかりやりたいです。そして将来人間関係が生い茂ったジャングルのような社会に疲れたら、またこの静かな世界、研究者の世界を体感したいです。

佳　作

先生からの贈り物

『喜嶋先生の静かな世界』　森　博嗣 著　講談社文庫

情報工学科１年　清綱 美吹

〝あなたは、私の恩師だと言える存在の人に出会っていますか〟この問いに「はい」と解答する人の多くは、まだ恩師だといえる人に出会ってない人に比べ、色々な人生のドラマがあった事だろう。なぜそう予測できるのか。それは、この本の主人公、そして私自身が恩師という存在に出会ったことで人生が大きく変わったからだ。

私はこの本を読み深く考えたことが三つある。

一つ目は、人との出会いだ。主人公は大学院生の時、ふと今の自分と未来の自分を見比べた。今はただ研究が自分にあるだけで、この先自分から研究がなくなってしまった時の恐怖心を抱き、その恐怖から逃れる為にただひたすら研究に没頭していた。

しかし、彼の中で大きな転機が訪れた。それは喜嶋先生との出会いだ。彼の人生に大きな影響を与えた人物だ。彼の中で恐怖から逃れる為の研究が、喜嶋先生と共に研究していくことで、自分の限界を知りたいや自分の寿命が縮まってもいいくらい、自分にとって研究は価値があるものだという考えに変化した。

年に数回、大学院生の飛び降り自殺がある。そのくらい追い込まれる生活の中だなぜ耐えられたのか。それは、研究することに夢中になり、もっと喜嶋先生と色々な研究をしたいという意思が強かったからだろう。

私にも、私の人生を変えてくれた先生がいる。その先生に出会っていなかったら、今の学校に入学することはなかっただろう。夢を常に応援し、背中を押して、私の世界を明るくしてくれた先生は、今では大切な恩師だ。

人との出会いは、主人公と私のように人生を変えることができるきっかけになる。

二つ目は、喜嶋先生が主人公に行った〝学問には王道しかない〟という言葉だ。歩くのが易しい近道ではなく、勇者が歩くべき清く正しい本道という意味だが、これは喜嶋先生の生き方の象徴でもある。主人公はこの言葉のおかげで研究者になれたという。道に迷ったらいつもこの言葉を思い出し、困難な方を選べという教えで常に行動した。その方が後悔がないからだ。

何度も何度も目標とするものに夢を抱き、挑戦し続けることで広い視野、広い範囲で様々なものを見ることができる。それは剣しい山を登ることと同じだ。登り切って初めて分かるように何でもチャレンジしないと分からない。同じ目標に向けてただ努力するのと、新しいことをつけ加えて複雑な方を努力するのとでは、明らかに後者の方がいいだろう。このような考えこそが、喜嶋流の考え方なのではないだろうか。

人はよく楽な道を選択し、のちに後悔することが多い。私もそうだ。今まで生きてきた中で後悔することの方が多かった。怖いことから逃げていくのではなく、思い切って行うほうが意外と楽しいかもしれない。私はそう感じた。

三つ目は、物語が終わるラスト一文だ。「きっと先生だけは…」なぜ曖昧な終わり方なのか。物語の終盤で喜嶋先生が大学を辞めていたことが主人公の耳に入った。その時彼は、辞めた理由が理解できていた。先生が辞めたことを知ったと同時に、自分自身と向き合った。その時、彼は今、喜嶋先生と共に研究していた頃の自分とはかけ離れていることに気づいた。「自分は今、学問の王道からはいない」と。だからこそ、自分の恩師である喜嶋先生だけは、自分の大切な人には、その道を歩み続けていてほしいという願いが残ったのだろう。

もしかすると、主人公は研究者を辞める道を考えていたのだろう。しかし私は、今でも研究者を続けていると考える。物語の始めの方に、「ただ茫然と立ち止まってしまった状態かもしれない」とある。彼は今も悩んでいるが、喜嶋先生との経験を振り返えることで、まだ新しいことに挑戦する〝学問には王道しかない〟という言葉を思い出し、考え直すだろう。それくらい彼の人生に、喜嶋先生という存在が大きい。だからこそ、迷っていても逃げないと私は思った。

私自身、恩師という存在は大きい。きっと主人公の中でも。そんな存在の人が一人でもいることは、人生においてすごく幸運だ。たとえ、先生ではなく、先輩や友達、身近な家族であったとしてもその中に、尊敬する人が一人でもいるということが、生きるための糧となるのではないだろうか。背中を押してくれる人、考え方がかっこいい人、誰にでも優しい人、自分の周りにいる全ての人は、私にとって大切な存在になっている。私はこのような人たちをこれからも大切にしたいと思う。そして今度は、自分自身が喜嶋先生のように、「あなたが私の恩師だ。尊敬している人だ」と周りの人から名前が挙がるようなそんな人になっていきたい。それまでは、〝学問の王道〟を歩み続ける。

第２回読書ラリー優秀者発表

図書館利用を促進すること 及び 冬季休業中に良書に親しみ教養を高めることを目的として、昨年度に引き続き、令和４年１２月１２日（月）～令和５年１月１３日（金）の期間で、第２回読書ラリーを開催しました。

実施期間は短かったものの、多くの本科生・専攻科生に参加いただき、上位３名を最優秀賞、４～６位を優秀者として表彰し、賞状及び副賞を贈呈しました。

最優秀賞

商船学科２年	森松　豊
商船学科５年	大島 利宗
情報工学科４年	村末 裕音

優秀賞

電子機械工学科３年	山﨑 樟太
商船学科１年	中本 滉大
電子・情報システム工学専攻１年	的場 遥佳

読書ラリーの表彰

教員推薦図書

インタフェースデザインの教科書【第２版】

井上　勝雄　著
丸善出版

電子機械工学科　　松原　貴史

環境・福祉・コロナなどの問題に加え、ディジタル化が進む現代社会において、様々な便利ツールが生み出されています。その例として、スマートフォンが挙げられます。スマートフォンは、年齢・性別を問わず人が簡単に画面（人と機械の接点）を操作することにより、それぞれの目的に応じた動作を満足することが可能です。

このように、人間と機械の接点となる部分を、一般的にインタフェースと呼んでいます。このインタフェースの設計（いわゆるインタフェースデザイン）には、人と機械の特性を十分考慮することが要求されます。

この本は、インタフェースデザインの歴史的背景から、著者の業務経験を踏まえたインタフェースデザインの設計方法まで、幅広く整理されています。私の研究テーマであるタブレット手順書の機能設計を行う際にも、とても参考になりました。

この本を読むことによって、皆さんがこれまで学習してきた原理原則的な知見の活かし方及びこれからの社会における便利で人にやさしいインタフェースデザインの在り方について、理解が深まると思います。将来、皆さんが様々な業界で人と機械をつなぐより良いインタフェースを生み出してくれる事を期待しています。

学科推薦図書コーナー

教員推薦図書

小一時間でゲームをつくる

――7 つの定番ゲームのプログラミングを体験

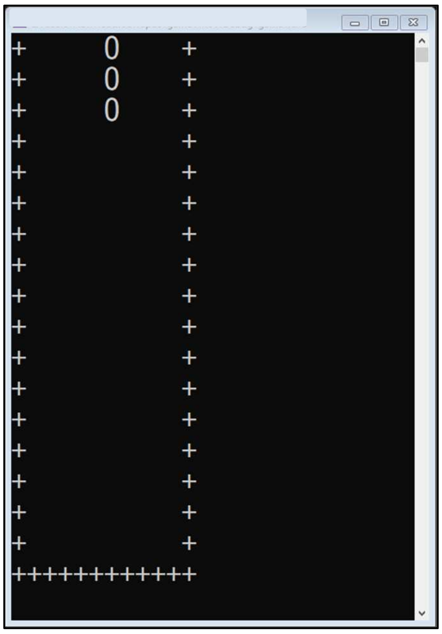
ゲエム道館 著
技術評論社

情報工学科　　重本 昌也

ゲームがお好きな方であれば、一度は「自分もゲームを作ってみたい」という考えに至ったことがあると思います。しかし、ゲームの作り方を教わる機会は本校の情報工学科でもありません。理由はおそらく、ゲームを作るのが大変すぎるからだと思います。

ゲームを作るためには、まずゲームの構成を考えなければいけません。構成ができたらプログラムを書き始め、キャラクターのドット絵や CG の作成、効果音や BGM の作曲を行い、そして最後にバグがないかの確認(デバッグ)を行う等、多くの工程が必要になります。授業を通してこれらの工程を行うには時間が足りません。

その点を考えると、今回紹介する表題の本はなんとも魅力的なタイトルです。授業の 90 分よりも短い時間で 1 本のゲームを作ることができます。この本で紹介するゲームはコマンドプロンプト上で作動するもので、右図のように『〇』や『+』等の記号を使ってゲームを再現しています。



この本を読みながらゲームを作るには、『Visual Studio』と呼ばれる開発環境を用意する必要があります。ちょうどいいことに、Visual Studio は図書館の真下にある情報教育センターで利用可能です。最初は本を真似して書いてみて、自分が作ったゲームが動く感動を味わってください。放課後の小一時間を使ってゲーム作りを体験し、プログラミングの楽しさに気付けてもらえたら幸いです。

ブックハンティングに参加して

今回、初めてブックハンティングに参加しましたが、大きな本屋に奥まで続く棚に並ぶ本を見て、胸のドキドキが止まりませんでした。流し見る様に歩き目的の棚に辿り着くと、本の種類の多さにまた驚かされました。

自分の欲しい本を選んだ後も専門外の棚を眺めながら歩いていましたが、思わず手に取ってみたくなるような本がズラリと並んでいました。見ているだけでも楽しかったです。次回も是非参加したいと思える時間でした。

商船学科１年　中本 滉大

僕は 6 月 18 日にブックハンティングとして広島市に行きました。自分１人で広島に行くことは初めてでとても不安でした。しかし、図書館にとある先輩が僕と同じでブックハンティングに行くという事で説明を受けていました。

そこでその先輩と話した結果、一緒に行っていただけることになり、結局そのまま広島市まで先輩といきました。僕はあの時先輩がいなかったら多分迷っていたと思います。先輩がいたお陰で無事に広島市に到着し、その後も楽しむことができました。その先輩には本当に感謝しています。

電子機械工学科１年　品川 澄海

ブックハンティングをするのは今回が初めてだったので、とても記憶に残る経験でした。

どういう本を選べばよいのかが分からず、初めの 40 分くらいは、ただ本棚の間を回って目に留まった表紙をじっくり眺めるくらいに留まっていましたが、最終的には自分が面白そうだ、この本が図書室に遭ったら利用するかなあ、と思った本を何冊か選びました。しかし、結局選んだ本の合計は 1 万円を下回ってしまったので、気になった本をもっと多く選べばよかった、と後になって惜しい気持ちになりました。

沢山の本があったり、知らない言葉が沢山あったり、普段はあまり感じられない感覚が多かったです。この先機会があれば、またブックハンティングに参加したいと思いました。

情報工学科１年　神田　陽

最近は、ネットショップなどにて本を購入し、本屋にわざわざ買いに行く人が少ないと思います。私もネットショップで本を購入する、そのひとりです。ですが今回のブックハンティングを通して、本屋で目当ての本を探す楽しみや、探している途中で新たな本との出会いなのが、本屋にはあると感じました。新たな発見や考えが今回のブックハンティングを通して経験でき、うれしく感じました。また機会がありましたら参加したいと感じました。

商船学科２年　谷口 楓真

少しでも図書館を利用する人が増えればいいなと思いながら、学生が興味を持てる本を選びました。図書館はよく利用していますが、書店にはなかなか行くことがないので今回の活動は良い機会でした。また本を選んでいる時に他学年の学生さんと協力することで、新しい友達もできました。

僕は事前にクラスメイトから海洋生物に関する本を頼まれていました。小説より図鑑の方がわかりやすいと思ったので写真も多い図鑑を選びました。

選んだ本がより多くの学生の手に渡ることを願っています。

商船学科３年　寺道　蒼

ブックハンティングに参加するのは、今回で 2 回目ですが、毎回違った新しい出会いがあるので、とても楽しいですし参加することができて、本当に良かったと思っています。

初めてブックハンティングに行ったときは、たくさんの本を一気に買うことに慣れていなかったため、選ぶときには少々身構えてしまいましたが、今回は臆することなく、自分が欲しいと思う本をたくさんの本を選ぶことができました。

またご縁があれば、ぜひ次のブックハンティングにも参加したいです。

情報工学科 3 年　吉野 桜花

私は、図書委員の代理で初めてブックハンティングに参加したのですが、店内がとても広く、頼まれた本を見つけるのはとても大変でした。それでも、自分がいつも見ないようなジャンルの本がたくさん置いてある場所を 1 時間も回ったのは初めてで、とてもワクワクしました。

普段は見ないので気づきませんでしたが、表紙を見るだけでも興味をそそられる本がたくさんあったので、今度友人を誘い行ってみようと思いました。とても楽しかったです。

電子機械工学科３年　大川 姫布

二年生の時以来二年ぶりに現地でのブックハンティングに参加しました。書籍を実際に手に取って試しに読んでみてどの本を選ぶか迷うことがこの企画の醍醐味と思っているため、この企画でそれができてとても光栄です。今回は商船学科の学生向けのものや大賞を受賞しているものなどをほぼ選びました。もし図書館に足を運ぶ機会があれば私たち図書委員がハンティングしたものを手に取ってぜひ読んでもらえると、その本を選んで良かったと思えます。

商船学科４年　中野 大輔

今回のブックハンティングは 2 年ぶりの実際に本屋で実施ということで、とても有意義に時間を過ごすことが出来ました。やはり、オンラインで本を探すよりも実際に手に取って本を選ぶ方が、試し読みもできるのでよいと思いました。

丸善広島店では、本の取扱数がとても多かったので、本選びではいつもより悩みましたが素直に自分が読みたいと思った本と、クラスのみんなが興味を持ってくれそうな本にたくさん出合うことが出来て、楽しかったです。

次回もぜひ参加したいです。

電子機械工学科４年　大道 敬久

ブックハンティングには今回が初めての参加であった。そのため、以前参加したことのある人にどのような本を選んだかなどを聞いて準備を行った。今回選んだ本は専門書と小説が同じくらいの量だったと思う。専門書に関しては参考になる本が図書館にまだあるため、何を選ぼうか迷った。改めて専門書のコーナーなどを見ていると、自分が興味を惹かれるものがたくさんあった。その中から数点選ぶことに迷ってしまい、時間を使ってしまった。どれが必要かを選択するのは大変だったが、とても充実した活動となった。

情報工学科４年　清水 蒼馬

低学年時の学習に苦しんでいた自分の状況と重ねながら、同じ科の 1 年生の学生と本校での学習に役立つ本を話し合いながら選べた。また，電磁気学に関する本を数冊選び，3，4，5 年とずっと学習できるように工夫した. 選んだ本を用いて学習に役立てれたらと思っている。

今回初めてブックハンティングに参加したが、他学年の学生と交流を深め、本に親しむことができたと思う。今回が最初で最後のブックハンティングになるが、この経験は一生忘れることはないだろう。

電子機械工学科５年　作本 悠輔

コロナウイルスの流行が落ち着きを見せ、2 年ぶりとなった書店でのブックハンティングですが、例年とは異なり、広島駅の改修工事のため、今年は天満屋八丁堀店 7 階の丸善広島店での開催となりました。

丸善広島店はライトノベルから洋書・専門書まで幅広い品揃えがあり、一日中背表紙を眺めるだけでも楽しめる場所です。私は USB-C やアルゴリズムについての技術書を選びましたが、探す途中にいくつもの本との出会いがあり、楽しかったです。

情報工学科５年　上野 大輔

ブックハンティングの様子

ブックハンティングコーナー

一般科目教員からのおすすめコーナー

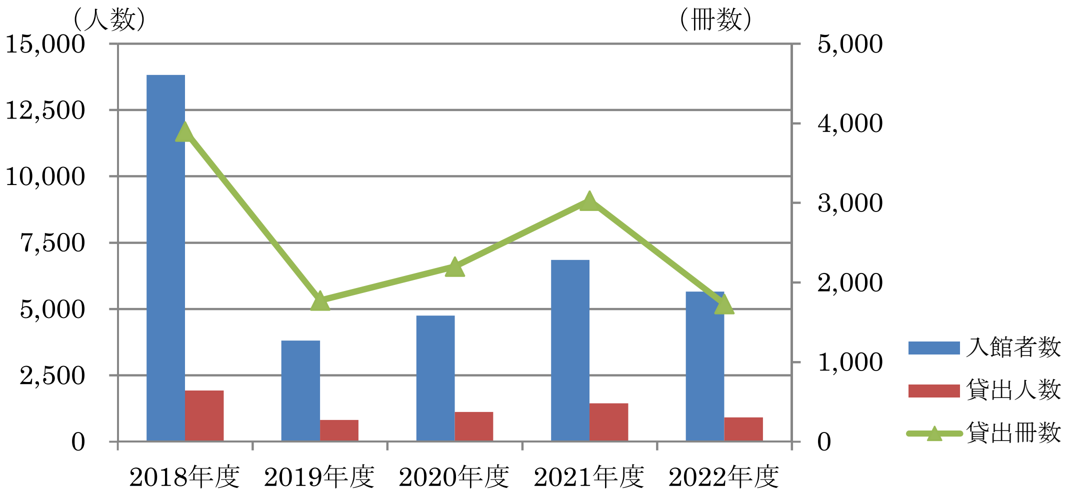
防災に関するコーナー

いのちを育むコーナー

図書館利用状況

令和 4 年 12 月 31 日現在

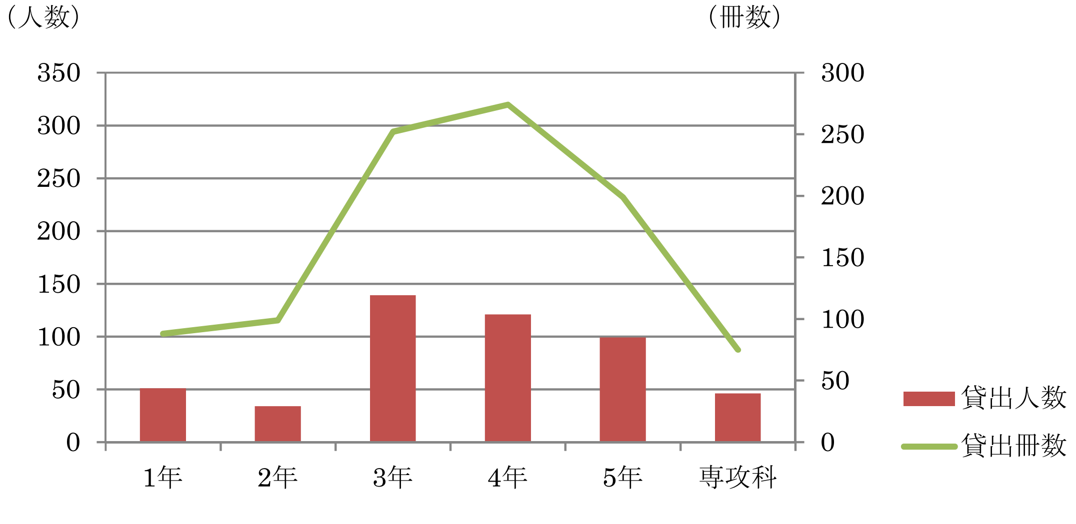
年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
入館者数	13,814	3,805	4,740	6,847	5,654
貸出人数	1,928	818	1,115	1,443	907
貸出冊数	3,900	1,777	2,202	3,028	1,729

2019 年度は図書館改修工事のため 6 月から臨時図書室を開設、2020 年度は新型コロナウイルス感染対策のため閉寮・時間外閉館のため入館者・貸出実績ともに減少

2022 年度学年別利用状況



	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	専攻科
貸出人数	51	34	139	121	99	46
貸出冊数	88	99	252	274	199	75

＜図書館だより・編集委員＞

委員長	浅　川　貴　史	(図　書　館　長)
委　員	小　林　孝一朗	(商　船　学　科)
〃	小　林　　　心	(電子機械工学科)
〃	山　田　　　博	(情 報 工 学 科)
〃	牛　見　真　博	(一　般　科　目)

＜図書館職員＞

礒　部　弥　生　，中　原 由 里 子

２０２３年（令和５年）３月　日発行

編集者兼発行者　　独立行政法人国立高等専門学校機構

大 島 商 船 高 等 専 門 学 校

〒７４２－２１９３　山口県大島郡周防大島町大字小松１０９１番地１

電話（０８２０）７４－５４５４（図書係）

https://www.oshima-k.ac.jp/library/